
親友だよね

ヒュンケル

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

親友だよね

【Nコード】

N1621E

【作者名】

ヒュンケル

【あらすじ】

兄弟のように仲が良かった親友、いつも助けてくれた親友、僕と君はいつも親友、親友を……

親友だよね

カーテンの隙間から漏れる朝日によって僕の目が覚めた。目覚し時計を見てみれば、時刻は既に八時を回っていた。

「うわ……やば」

寝ぼけていた脳と体がビクんと痙攣して、よだれを垂らしながら腑抜けた声を出す。急いで学校に行かないと大変だ、遅刻したら担任にまた怒鳴られる。

布団を無造作に蹴り飛ばし、ベッドから弾けるように体を起き上げらせ部屋を飛び出る。顔を洗って歯を磨き、急いで終わらせてからトイレに駆け込み用を済ませ、再び部屋へ飛び込んで、制服に着替えて鞆を手に玄関へ急ぐ。

母が朝飯は？ などと訊いてくるが、時間を見てくれと内心思いながら、大声で遅刻するからって伝える。

《昨日、××市の住宅地の十字路で、大型トラックによる轢き逃げ事件で死亡した、××高校の》

テレビから流れるニュースに耳を傾けたが、急いでいた為か、意味は理解出来なかった。

行ってきますと母に告げ、玄関を飛び出て表へと出る。

四月下旬、どんどん暖かくなってくるが、まだ早朝の空気は肌にくたく触れた。

冷たい空気のおかげで目が完全に覚め、閑静な住宅地に位置する、自宅から歩いて十分程度の距離にある××高校へ続く道を、僕は歩き始める。

歩道と車道の区別もろくにない、住宅地の狭い路地。道の両側は

全て住宅。それは僕が子供の頃から生活している、誰がどこに住んでるかも知っている、僕が住む、僕が知っているいつもの町並み。人通りがまつたくない通学路がまつすぐ伸びている、がらんとした無機質な路地、まるで自分しか存在しないかのような、耳を劈くような静寂に包まれた路地。

「おーっす！ おはよーさん！」

その静寂をぶち破った背後からの大声に、僕はビクンと体を跳ね上げて振り向いた。こんなの毎日の事だ、誰の声かもすぐに判る、判っているから驚くこと無く反応出来るのだが、今回だけは何故か酷く驚いてしまった。いつも以上の静寂の所為なのか、はたまたまだ完全に目が覚めていなかったのか。

「太一か、脅かすなよ」

「とっておきの大ニュースだ！ 俺は昨日、ついに彼女が出来た！」

「別れたの間違いだろが！」

「そうだった！」

朝からハイテンションのこの男子生徒は中山太一、僕と同じ高校に通い、小さい頃から近所に住んでいて、一緒にいる幼馴染。いつもふざけあつたり、馬鹿な言い合いをして、兄弟のように仲が良いつて自慢出来るほどの親友だ、口には恥ずかしくて出せないが、それは太一だつて思っている事だろう。

よく二人でこうやって高校へ登校するのだが、今日はいつにも増してテンションが高いなこいつ。

親友だよ

「もう忘れた！ 俺とじゃ釣り合わなかったんだよ、どうせ新しい彼女が出来るつて」

「出来るよ良いな」

「何だよそのやる気のない返事！ お前も彼女見つけるんだよ！」

「僕はまだ良いって、そもそも僕たち今年受験だろ？ んな恋愛してる暇ないし、探す暇もないって」

「真面目だな、でもそうだな、女と遊んで受験落ちたら馬鹿みただもんな！」

「太一はいつも馬鹿だけだな」

「うるせえな、否定はしないけど」

「否定しろよ！」

やっぱり馬鹿だこいつ、でもそれが面白い、これがいつもの僕たちのやり取りだ。息もぴったりだし、クラスの友達からはお笑い芸人になれよ何ても言われているが、さすがに勘弁して欲しい。

そんな僕たちも今年で高校三年、それぞれが別々の道を辿り始める別れの旅立ちだ、大学受験、就職、様々な道が僕たちを待っている。それは僕と太一も同じで、お互いが違う別の大学に受験をしようとして勉強を頑張っている。

そう、今まで、幼稚園の頃から一緒にいた僕たちは遂に別れてしまふのだ、いつかは引越しをして住んでる場所は変わり、仕事によって会う機会もほとんどなくなってくるかも知れない。そう思うととても胸が熱くなり、悲しい気持ちになってくる。

「あゝあ、早いよな、もう高校三年か」

ニッコリと笑みを浮かべて、青空を見上げて、物思いに耽るかのようにつうつと息を吐き出す。こんな顔をする太一は珍しい、いつもみたいにハイテンションに騒いで欲しいんだが、やっぱり太一も寂しいんだろうな、僕だって、まだ卒業まで時間はたっぷりあるってのに、何だか涙が込み上げてきそうだな、意外と涙もろかったんだな、僕は。

「そついえば覚えてるか？ 小学生や中学生だった頃、お前毎日いじめられてたよな」

「覚えてるよ、結構辛かったな。あの時は、でも、太一のおかげで頑張れた」

比較的大人しかった僕はいつつもクラスの連中からかわれたりしていじめられていた。でも太一がいつも体を張って僕を守ってくれた時は嬉しくて涙が出た、何も出来ない僕にいつも仲良く接してくれて本当に嬉しかった、だから僕も太一が困ったら少しでも力になりたくて、いつもお互いが手と手を取り合って助け合っていた。それは今でも続いている変わらない友情だ。

「毎日泣いてたからな、あの時は本当に爆笑だったぜ！」

「爆笑かよ！？」

「だって泣き顔が面白かった、鼻水が凄かったな」

「うるせえな、酷いぞ太一！」

「はっはっは！ 懐かしい思い出だな。まあ、友達がいじめられてたら助けるのが当然だ、泣き顔は笑ったけど、いじめつてのは許せないからな、ましてや友達がされてちゃな」

「太一……」

泣き顔は余計だけど、この真剣な表情を見て、僕は嬉しくなった。太一は僕の親友だ、嘘も何もつかない、思った事は正直に話す、大切な親友。何だか臭いセリフだけど、その言葉に嘘は何も無い、ずっと一緒にいた僕が言うんだから間違いは無い。

最高の親友だ、こんな素晴らしい親友を持つて僕は幸せ者だ、正直者で友達思いで、体を張って親友を護る、こんな素晴らしい親友はどこを探したっていないだろう。そうなのに、そのはずなのに

自分は最低の人間だって、どうして僕は思うのだろう？

「なあ」

「え、な、なに？」

ボーっとしてたら声を掛けられたので驚いた、もうじき高校に辿り着く、肌に纏わりつく冷たい空気もだんだん心地良くなってきて気持ちが良い。

返事をして、少し歩くと、眼前に十字路があった。そこを右に曲がった先に高校があるのだが、太一はぴょんと跳ぶように僕の前に飛び出て、十字路を背に僕に向くと、清々しいくらいの元気な笑顔で。

「俺たち、ずっと友達だよな？ 親友だよな！」

一瞬、その言葉にどう返事をして良いのか迷った、何でだろう？でもすぐに答えは見つかった、これしか返答はないだろう。

僕もニツコリと笑顔を浮かべて、同じように。

「当然だろ？ 僕たちはずっと親友だよ！」

「え、ずっとこんなにやくだよ？」

「どんな聞き間違いだよ！？」

いつものふざけた太一に戻った、だからって唐突過ぎである意味困るんだけど、変に辛気臭くなったり、今更友情の確認だって必要ない、こうやって馬鹿騒ぎした方が嬉しい、愉しくて愉しくて、とても幸せだ！

「それにしても、今日も良い天気だな、雲一つ無い青空だぜ？ 空気が清々しいし、こんな気持ちが良い朝はない、そうだろ？」

「そうだな、最初は少し寒く感じたけど、歩きながら話したら丁度良くなって来たな」

「ああ、それに、この通学路、今日は人通りがまったくないし、何だか静かで良い感じだ」

いつもはサラリーマンや同じ高校や別の学校の生徒が通っているんだが、だからって少ないけど、今日は僕と太一しかいなかった。つていうか、太一と話して夢中になっていて忘れてたけど、もう遅刻寸前だったんだ、というかも遅刻したんじゃないのか？ だから人通りがないんだ。

「おい太一、こんな十字路の前で立ち止まってるなよ、もう遅刻するぞ、つていうかも遅刻だし」

「あはは、俺たちが遅刻何ていつもの事だろ？」

「そうだけどさ、でも三年で受験だし、少し慌てた方が良かった」

「そりゃそうか……でもさ、その前に、もう一度、訊いて良いか？」
「え、何？」

返事をしながら、携帯のディスプレイの時計を見てみると、案の定、朝のホームルームが始まる一分前だった、でも担任は教室に来るのが五分ほど遅い、今なら走って間に合うはずだ。太一は何を僕に訊きたいんだ？ 早くして欲しい。

「俺とお前は親友だよな？ 手と手を取り合って助け合う、困ったときは相談しあう、昔っから、まったく変わらない親友だよな？」

何を訊くのかと思えば、またこんな判りきった事か。言われずとも、答えは変わらない。

親友だよな

「さつきも言ったけど、僕とお前は一生、何があっても親友だ！ 判ってるだろ？ 一体どうしたんだ？ 何かあったのか？」

「あはは、俺とお前は親友か、そうだよなー！ 俺とお前はうゆん

しだよなー！」

「親友って言葉を反対から読むな！ 何だよ、うゆんしって!？」

「ノリだよ、ノリ！」

「どんなノリだよ！」

「あはは、そうか、俺とお前は親友か、そうだよな、当たり前だよな、俺とお前は親友だなんて」

やっぱりいつもと変わらないな、太一は元気で明るい、最高の親友の太一だ。何かあったってのは僕の思い過ごしか。

すると、太一は僕に体を向けながら、後ろに小さく跳ぶと、十字路の中央に立った。いつもと変わらぬ元気な笑顔、見ていてこっちも元気になる笑顔。

「この嘘つき野郎!!」

ずちゃ、

太一が消えた。十字路の右から突然横切った黒い大きな塊が、太一の体を、異様な音を立てて轢き潰した。何が起きたのか理解出来ない。大きな塊が通り過ぎた後、十字路の中央の路面にべっちゃりとした、赤黒い血溜りが広がっていた。

感覚が麻痺してしまい、この赤い血溜りが何なのか、黒い塊が何だったのか、太一が何処へ消えたのか判らなかった。

「た、たい……ち？」

親友だよな

シンと不気味な静寂が辺りを貫く、僕以外は何も返事をしない、

何も音を立てない。そういえば、黒い塊が横切る直前、太一はおかしなことを言った。この嘘つき野郎！　つて。

顔面が壊れたような恐ろしい笑顔を満面に浮かべて。

ぞわっ、と全身の産毛が逆立った。ガタガタと全身の骨まで震え始め、僕は大きく目を見開いて血溜りを凝視する。

思い出してしまった、思い出してしまった、思い出したくも無い、今すぐ全力で逃げ出したい事を思い出してしまった。ほんのちよつと前の記憶を鮮やかに過去のフィルムが巻き戻して、僕に思い出させてしまった。

僕と太一は同じ女子が好きだった。

学校一の美少女で、男子のほとんどは彼女に惚れていた、そんなのは誰もが知っている事実だった。僕も太一もお互いがそれを判っていた、絶対に付き合えるわけない、ただ好きだな、可愛いなって眺めているだけで良いって、それなのに。

「訊いて驚け！　俺は伝説を成し遂げた！　付き合えたんだよ、あの学校一の美少女と！」

信じられないと驚いた、嘘だろって笑ったが、でもすぐに真実何だって判明して、太一を笑顔で賞賛した。

でも僕の内心は複雑だった、太一は馬鹿だけど、度胸だってあつたし、人柄だって尊敬に値するほどだ。太一の周りにはいつも友達がいいた、男子でも女子でも関係なく、大勢の友達をすぐに作っていた。それに対して僕はまったくの駄目駄目、いつもいじめられてばかりで、性格も太一といるときしか明るくならない、高校になって友達が増えたけど、それは単に太一と仲が良いってだけのオマケ扱い。何でも出来る太一を僕は好きだった半面、妬んだ、どうして

太一と僕はこんなに違うんだ、同じ人間なのにどうして違うんだ。

なあ！ 昨日、遂に俺はファーストキスを成功させた！

いやあ、学校一の美少女と付き合えて幸せだな。

悪い！ 今日デートなんだ、一緒に帰れねえや

毎日毎日、訊きたくないのに訊かされる自慢話、その話で周りの生徒たちは良いなと愚痴を零しながら、笑って太一の話の話を聞いていた。

どうしてこんなに違うんだ

僕には判った、僕と太一の距離が少しずつ離れていっている事に、僕たちの友情に溝が出来ている事に。太一は気付いていないだろう、でも僕には判る、僕たちの永遠の友情は脆くも崩れ去ろうとしているって。

僕も太一みたいになりたい

妬んだ、妬んで、それは憎悪になっているとも感じた。馬鹿だ僕は、何で太一をこんなに恨んでるんだよ、またいつもみたいに笑っていたよう、そうして友情を保とうぜ、太一は彼女に夢中で気付いていないから大丈夫だ。

でも、僕も太一のようになりたいて、昔から思っていた、願っていた。そうなれば確実に僕は変わるんだ、護られない、強い人間になれるって。

親友だよ

彼女を奪いたかった

僕が太一から彼女を奪えば、僕は変われる。だから、卑怯な手だつて判つてたけど、彼女にこつそり嘘をついた、太一のあるはずもない悪い噂を、そうしてちよつとでも亀裂を与えて別れさせたかつたのに。

「太一くんはそんなことしないよ、どうして嘘をつくの？ 太一くんの友達でしょ？」

胸が苦しんだ、心臓が爆発するくらい痛かった。

何て卑怯な、卑劣な、最低のクズなんだろう。死にたかつた、そつだよ、彼女の言うとおりだ、親友と彼女を別れさせる、そんな親友にあるまじき行動をどうしてしたのか理解が出来なかつた。

いつつも助けてくれた太一、それに僕は裏切り行為をしているんだ、親友にこんな事をするなんて最低だ、だつたら。

親友だと思わなければ、最低じゃなくなる。

放課後、久しぶりに僕と太一は一緒に下校した。いつもの十字路を曲がり、家へ向かおうとしたが、そこで太一はいつもの自慢を僕にした。でも何を言つても関係ない、僕と太一は親友じゃない。親友の話に耳を傾けない、ただ笑顔で訊いた振りをしていれば良い、早く太一と彼女を別れられる方法を考えないと。

だが太一は十字路を背に、僕に笑顔を向けて、耳を疑うような事を言つた。その言葉を訊いた瞬間、僕は微笑わらつた。

「あゝ俺つてやっぱあいつと付き合えて幸せだな、これだけの幸せ味わえたら、もう死んだつて良いな」

シンダッテイイ？

本人は冗談のつもりで言ったはずだ、でも僕はその願いを素直に叶えさせようとした。初めて僕が太一を助けるんだ、太一のために何かが出来るとだ！

「え」

思いつきり、ドンと太一の胸を両手で突き飛ばした。太一の体が十字路の中央に倒れた瞬間。ブオオオオンと大きな音が住宅地に響いて。

ずちゃ、

黒い大型のトラックが倒れた太一に突っ込んだ。湿った音が響き、大型のトラックは何も気付かなかったかのように、そのまま走り去って消えて行った。

トラックが通り過ぎた、太一が轢かれた十字路の路面には、血溜りと、それに浮かぶ太一の体があった。だが体の様子がおかしい、両腕がおかしな方向に捻じ曲がっている、肘や手の拳から骨が滅茶苦茶に突き出していた。片足はぺちゃんこになって体から離れ、骨だか肉だか訳の判らないモノがはみ出している。

「ひ、ひい」

小さな悲鳴が出た、目の前の凄惨な光景に身が竦んだ。

腹から内臓が飛び出し、頭部の上半分は脳みそを辺りに飛び散らせているだけで、何も残っていないかった、タイヤに潰されて、そのまま原形も留めぬまま消えてしまったのだろう。

誰がみても、太一だとは判らない、ただ頭部の下半分、口の部分が耳まで裂けたような気持ちは悪い笑みを浮かべているだけで。

その物体を目を見開いて、体を竦ませている僕は恐怖で、恐ろし

壁に激突しながら、必死になって家へ駆け込んだんだ。

脳内で巻き戻されたフィルムから思い出された今までの、そして
《昨日》の記憶。

十字路の中央にあるのは血溜りだけ、これは昨日の太一の血だ、
今さっき見たのは僕の幻だったのか？

僕が殺してしまった、轢き逃げだからって、突き飛ばしたのは僕
だ。僕は狂っていたんだ、親友を親友じゃないって思って、その親
友を妬んで、彼女と別れさせようとして、そして殺した。

親友を殺した事実が正常に戻った僕の間を戻してくれた。目か
らボロボロと零れ落ちる涙、ごめん、ごめん、ごめん、ごめん。太
一の言う通りだ、僕は嘘つきだ、親友を殺す奴が親友だって良く言
える。

ずる

僕の見開かれた目に、突如として異様なモノが映りこんだ。十字
路の中央の血溜りの中からもぞもぞと何かが蠢いていた、それが何
なのかも判らず、涙を流しながらそれを見た。血溜りが膨れ上がる、
サッカーボールやバスケットボールより少し小さめの球体のような
モノに押し上げられるように、血が盛り上がる。

ウソツキダ、ウソツキダ、ウソツキダ、ウソツキダ。

血から盛り上がる何かから聞こえた声に小さな悲鳴を上げる、恐
怖と戦慄が背筋を駆け上がった。

それは太一の声だった。

呪文のように繰り返される、ウソツキという言葉、僕は身を竦ま
せ、全身を硬直させながらも、倒れるように路面に両膝を、そして
両手を付いて、血溜りに向かって土下座をする。

「ごめん！ ごめん！ ごめん！ ごめん！ ごめん！ 衝動的だったんだ！ お前が羨ましいから、僕は嫉妬したただけなんだ！ ごめん！ 許して！ 許して！ 許してください！！！」

オ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”オ”

太一とは思えないほどの怒りと憎悪に満ち溢れた呻き、ごめん、許して、許して、お願いします！

何度も地面に頭を叩き付けて土下座を繰り返す。そしてふと、顔を上げて、盛り上がった血溜りを見た瞬間、心臓が飛び跳ねた、慄然とした、目を見開いて僕が見た、その盛り上がった血溜りが姿を現していた。

ずちゃ、ずちゃ、ずちゃ

湿った、何かが蠢く音と共に這い出たそれは、人間の頭だった。脳みそが零れ、眼球からは血と脂と、何か糸を引いた粘液が滴り落ち、顔面の皮膚は一面にささくれが出来上がり、血が浮かび上がっている。人間とは思えない頭。それが何なのか理解した瞬間、悲鳴すら出なかった。

それは太一の頭部だった。

「！！！」

言葉すらでず、ただ絶叫だけが心の中で悲鳴となって叫ばれる。僕は恐怖で動けない体のまま、必死になって心の中で悲鳴と共に「めんなさいと念仏のように唱え続けるのに、頭部が恐ろしい声を出す。」

にうぎゃぎゃぎゃ！ 血がイダイイダイいいあああゆるじて！
ゆるじてください！ だいぢお願いぐえええええ！ チギリナイデ
チギリナイデ足がチギれるううオ”オ”ア”アアアアアア
ア！ おごうエエエグエエエエだいいいいだいいいいボク
ダチハシンユウデシヨ？ ボクタチハシンユウ

ずちや、

《本日のニュースです。昨日の夕方頃、××市で大型トラックによる轢き逃げ事件がありました、被害者の××高校の男子生徒、××
××くんは原形を留めておらず、即死したと見られ、先日亡くなっ
た中山太一くんと同じ場所で轢かれたとあって、同一人物による犯
行ではないかと、警察は捜査を進めて》

僕たちは親友だから、困った時はお互いを助け合っていていこう
ね！ だって僕たちは親友だからさ、だから助け合っつて、約束し
よう。

もし、シンユウを裏切ったりしたら

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1621e/>

親友だよね

2008年11月7日07時03分発行